哲学的時間論における二つの誤謬、および「自己出産モデル」の意義

2018 年 3 月 18 日 宮国淳
http://miya.aki.gs/mblog/
※ 本レポートの内容を引用・参照される場合は
出典の明記をお願いいたします。

＜目次＞

Ⅰ．はじめに（１ページ）
Ⅱ．「現実性」と言葉と私（２ページ）
Ⅲ．「現在（今）が動く」「今・現在を経験している」という誤謬（５ページ）
Ⅳ．「動かないものがあるから動くものが分かる」という誤謬（７ページ）
Ⅴ．「自己出産モデル」の問題点および積極的意義（９ページ）

Ⅰ．はじめに

　本稿は、

森岡正博著「独在今在此在的存在者 生命の哲学の構築に向けて（９）」『現代生命哲学研究』第 6 号（2017 年 3 月):101-156

・・・の時間論について検討するものである。最初に、哲学的時間論の前提となる「現実性」「実在性」「生きられているリアリティ」区別における森岡氏（そして永井氏）の見解の問題点について指摘した後、時間とは何かという哲学的問題の解決を阻む誤謬、

（１）「今・現在を経験している」という誤謬
（２）「動かないものがあるから動くものが分かる」という誤謬

について説明した上で、森岡氏の提唱される「自己出産モデル」についてその問題点および意義について検討する。
　森岡氏の「自己出産モデル」は上記（２）の誤謬から逃れられていない一方で、（１）の誤謬から不完全ながらも抜け出し始めている、（森岡氏が分析している）永井氏の見解から一歩先に進めている、積極的意義も有していると言えよう。

Ⅱ.「現実性」と言葉と私

まずは森岡氏（そして永井氏）の理論における「現実性」「実在性」、さらにはそこにおける「言語」の位置づけに関して問題点があることを指摘しておく。

森岡氏は「現実性」と「実在性」について次のように説明されている。

> *永井は「現実性（アクチュアリティ）」と「実在性（リアリティ）」を峻別する。永井の説明方式を離れ、森岡の方式で説明する。たとえば、目の前に見える山が青いとする。このとき、「私の目の前に見える山が青い」と言うことができる。これが実在性の次元である。ところが、よく考えてみると、実はこれ以上のことが成立しているのである。すなわち、「私の目の前に見える山が青い、ということがほんとうに起きている」ということが成立しているのである。このときの、「ということがほんとうに起きている」の部分が現実性の次元である。 面白いことに、「ということがほんとうに起きている」と付け加えて言うことで、 世界に何が存在するかというその内実について、私は何一つ付け加えていない。 これは単に言葉使いだけの問題ではない。「私の目の前に見える山が青い」ということと、「私の目の前に見える山が青い、ということがほんとうに起きている」ということを比べたとき、実際に成立しているのは後者のほうである。*（森岡氏、104 ページ）

・・・この森岡氏の見解は、「現実性」の記述として不正確である。“*「私の目の前に見える山が青い」と言う*”こと、そのものが「現実性」なのである（もし本当にそう言ったのならば）。実際に喋ったことは具体的な事実だからである（もし実際に喋ったり思い浮かべたりしていなければ「現実性」はそこにはない）。つまり「現実性」と言うのならば、

・何かが見えている
・「私の目の前に見える山が青い」と言った

この二点になるはずなのだ。**見えているものを「青い山」あるいは「山が青い」と呼んだ、ある****経験と言葉とが繋がった、その事実があるだけ**なのだ。***「ということがほんとうに起きている」*のかどうかは、事実の客観性の問題、何度見てもそうだとか誰が見てもそうだとか、そういう「実在性」レベルの問題、より正確には「*生きられているリアリティ*」**（森岡氏、125 ページ）**のレベルの問題**であるのだ。「*生きられているリアリティ*」とは具体的に次のようなものである。

> *「生きられているリアリティ」とは、生きていくための前提条件として私が本気で*

> *は疑っていないような、世界のありさまのことである。そのありさまが本当のことなのかどうかを理性で疑うことはできるのだけれども、しかしながら世界を生きている私が本気で疑っているわけではないような世界のありさまのことである。たとえば明日という日がやってくるだろうこと、この部屋の外側に三次元の外界が広がっているだろうこと、これらを理性で疑うことは十分に可能だが、私はこれらを本気で疑って生きてはいない。私が死んだ後に他の人間たちがこの世で生き続けるであろうことを、私は理性で十分に疑うことができるが、しかし私はそれを本気で疑って生きてはいない。私が生きていく上で前提としているような、世界はそうなっているに決まっているという確信に近いもの、それが「生きられているリアリティ」である。*（森岡氏、125～126 ページ）

・・・森岡氏は、具体的経験として実際に現れている事実（見えているもの、聞こえているものや感じているもの）の「現実性」と「*ほんとうに起きている*」という客観的事実把握、「*世界はそうなっているに決まっているという確信*」とを混同してしまっているのかもしれない。
　同様に、以下の永井氏の見解も現実性と実在性の混同に基づいている。

> *さらに言えば、「〈私〉という概念の「〈 〉」の部分こそが、「無内包の現実性」を表わしている。「私」を「〈 〉」で囲むことによって、「私」の実在性に何かが付け加えられたわけではない。「私」を「〈 〉」で囲むことによって、〈私〉が現実性の次元のなにものかであることが表わされているわけであり、「私」ではなく「〈私〉」とわざわざ言うときには、「〈私〉」というものの現実性の側面が取り立てて強調されているのである。永井は「〈 〉」を、「端的にこのこれであること」「これ性(haecceity)」と言い換えている。Haecceity とはヨーロッパ中世哲学で用いられた概念であり、現代英語では thisness と訳される。ドゥンス・ スコトゥスに帰せられる概念である。永井の現実性の議論は、このような「これ性」の議論と接続させると分かりやすい。*（森岡氏、106 ページ）

・・・私を＜＞で囲んだからといって、それが「現実性」になるという保証はどこにもないのである。現実性としては、「私」という言語表現と、例えば鏡やら写真に写っているその像、そこに見えているもの、だけなのだ。そこにはヴィトゲンシュタインの言うように**「形而上学的な主体」、あるいは観念的な主体・主観というものなどどこにも「現実性」として現れてなどいない**のである。また、鏡に写ったり写真に写っている像を「私」と認識するためには、鏡やら写真・カメラの機能といった因果関係の連鎖（その像は“本物”ではない“写し”であるということも含め）という前提が必要である。さらには、

> *君は、これは眼と視野の関係と同じ事情だと言う。だが、君は現実に眼を見ることはない。*
> *そして、視野におけるいかなるものからも、それが眼によって見られていることは推論されない。*（ウィトゲンシュタイン著・野矢茂樹訳『論理哲学論考』岩波文庫、116 ページ）

・・・つまり**「現実性」のレベルにおいては「眼が見ているのではない」**のだ。**文章としては**（本稿も含め）**「見えているもの」と書くしかないのであるが、より厳密に説明すれば、それは「見られているもの」「見えているもの」ではなく、ただただ現れているもの（純粋経験）なのであって、それが「*眼によって見られている*」あるいは「私によって見られている」と説明できるのは、あくまで因果関係による根拠づけがあってのこと**なのである（つまり「*推論されない*」というのは言い過ぎだ、ということである）。つまり、**「私」という実在とは、文字通り「実在性」レベルの問題**ということなのだ。

> *ヴィトゲンシュタインは、独我論の意味するところのものは正しいと言う。しかし言語でそれを語ることはできない。そのかわりに、それは「示される」という形で私の前にあらわになる（sich zeigen）。彼は「語られる」ことと「示される」ことを峻別する。そして前者は否定されるが、後者は肯定される。この方式は、それについて語ろうとする営みが挫折するそのたびごとにそれが示されうるという否定神学的アプローチであると考えることができる。そして、この語られ得ないものとは、「主体」のことである。なぜなら「主体」は世界に属さないからである。彼はこの「主体」を「形而上学的主体」とも言い換える。この、世界に属さないがゆえに語ることができないが、しかし示されることはある「形而上学的主体」こそが、本論文で対象にしている「独在的存在者」である。彼がこの箇所で言う「独我論」は、独在的存在者および独在性をその内容とするような意味での独我論であると考えられる。*（森岡氏、109 ページ）

・・・“*「語られる」ことと「示される」こととを峻別する*“のは、それぞれ別の経験であるから当たり前ではあるのだが、言語表現した事実は否定しようもない事実、「現実性」であることに変わりはない。**「示される」ことのみ肯定して「語られる」ことだけ否定することなどできないのである。「語られてしまった」事実をどう否定しろというのであろうか？**

「*主体*」が「*語られえない*」とは、結局のところ、「主体」という言葉はあるし「主体」と言語表現することもできる。しかしそこにあるのは「言葉」のみであって、それに対応する具体的経験というものをどこにも見つけることができない、**言語表現を説明するための根拠（具体的経験の事実＝純粋経験）をどこにも見つけることができない**という

ことなのである。
　つまり、上記の「*独在的存在者*」とは、「実在性」レベルにおける客観認識である、ということなのだ。「私」という言葉が適用できるのは、「実在性」あるいは森岡氏の言う「*生きられているリアリティ*」のレベルなのだ。"*私の身体についても報告が為され、また、どの部分が私の意志に従いどの部分が従わないか等が語られねばならない*"（森岡氏、108 ページ：『論理哲学論稿』からの引用）という"*組織化された知*"（森岡氏、124 ページ)、より具体的には因果関係の連鎖を前提としているということなのである。
　また、"世界"というものもやはり「生きられているリアリティ」「実在性」に基づいている。「現実性」として現れている具体的経験は、あくまで実際に見えているもの・聞こえているもの・感じているもの、言葉が浮かんできたことや喋ったり書いたりしたこと、浮かんできた心像など・・・具体的経験「内容」なのである。それは「世界」ではない。「世界」を根拠づけているのはあくまで"*組織化された知*"なのである。つまり「実在性」においては「私」というものは「世界」に属しているのである。

Ⅲ.「現在（今）が動く」「今・現在を経験している」という誤謬

　永井氏によれば「*時間に固有の問題は現在（今）が動くという不思議さに絞られることになるだろう*」（森岡氏、107 ページ)。そして、

> *永井がここで言う「現在（今）」とは、無内包の現実性としての「〈今〉」を緩く押さえたものであると考えられる。永井はここで、「現在（今）」が「動く」と　いう点に、「〈私〉」との決定的な差異を見ている。ともに無内包の現実性であるにもかかわらず、「〈私〉」は動かないが、「〈今〉」は動くのである。*
> 　*永井は、無内包の現実性である「〈今〉」を、二つの概念に分けて考察している。ひとつは「端的な現実の現在」である。これは「〈今〉」をその「これ性」に強い照明を当てて理解したときのものである。もうひとつは「現実の動く現在」である。これは「〈今〉」をその「動くこと」「なること」に強い照明を当てて理解したときのものである。*（森岡氏、107 ページ）

・・・と、「〈今〉」を「現実性」としてしまっている。しかし、これも「私」と同様「実在性」「生きられているリアリティ」のレベルの話であるのだ。＜＞をつけたからといって「現実性」の話になるわけではないのだ。
　どういうことかというと、ヴィトゲンシュタインが、「思考し表象する主体」「形而上学的な主体」の否定をしているのと同様に、「現在」「今」というような具体的経験など

どこにも見つけることができない、ということなのだ。

“モデル的”に考えないでほしい。あくまで“具体的に”実際の経験がどのようなものなのか検証する必要があるのだ。**私たちが実際に経験しているのは、実際に見えているもの・聞こえているもの・感じているもの、言葉（を喋ったり書いたり読んだりしたこと）や浮かんできたイメージなどである。「現在そのもの」という経験などどこにもないのであって、実際に経験している事実、そこに「現在」という概念を事後的にあてはめているだけなのである。**

具体的に説明してみよう・・・例えば、じーっと白い壁を見ているとする。そのとき、時間など流れているであろうか？ **そこには「私」も「主体」もない、ただそこに見えている（より厳密にはただ現れている）ものだけなのだ。そしてそれは「今」でも「現在」でもない。ただ現れているものだけなのである。そこに見えている白い壁が「今」ではないのは当然であろう。**

そこに「変化」あるいは「差異」というものなど生じているであろうか？見えている白い壁はそのままである。「流れ」「動き」というものなどそこにあるだろうか？

そのとき**「白い壁だ」という言葉を思い浮かべたり、その白い壁に関する何らかのイメージが浮かんできたり、その連想したイメージに伴いある情動的感覚が生じたり、新たな経験が現れてくる、そういった「経験の変化」というものは確かにある。しかしあくまで、経験が生じたり、消え去ったり、あるいはそのままとどまったりしているだけなのであって、そこに「今そのもの」「現在そのもの」という具体的経験などどこにも見出すことはできない**のである。

つまり**時間が流れているのではない。あくまで経験が変化しているだけ**なのである。「現在」とは経験していることに事後的にあてはめた概念・言葉である。実際にあるのは経験だけなのであって、それを言語表現することも、やはり経験なのである。それはもちろん「現在そのもの」の経験ではない。

時間が流れているから経験が変化するのではない。経験の変化を時間の流れと呼んでいるのである。永井氏・森岡氏の分類に従えば、「経験の変化」が「現実性」であり、「時間の流れ」は「実在性」「生きられているリアリティ」なのである。現実性と実在性では順序が真逆になっているということなのだ。

以下のような問いも、「現実性」を転倒させて捉えていることから生じていると言える。

> *まず「生きられている時間的世界」とは、私がありありと経験しているような、時間が流れる世界のことである。そして時間は流れていくにもかかわらず、 私が世界を経験しているのはつねに「いま」である。すなわち時間は流れていくのだけれども、「いま」はつねに「いま」のままとどまるという不思議なことが起きている。これはアリストテレスの時間論以降、哲学者の頭を悩まし続けている難問である。*

（森岡氏、129 ページ）

時間は流れていくのだけれども、「いま」はつねに「いま」のままとどまるという時間論の難問がある。「いま」起きていることは過去へと流れ去っていくけれども、それにもかかわらず「いま」は「いま」のままつねに残り続けるという難問である。
（森岡氏、134 ページ）

・・・「いまそのもの」、「過去そのもの」の経験などどこにもない。そんなものどこを探しても見つかることはないのだ。あるのは、ただ「見えているもの」「聞こえているもの」「感じているもの」（言葉やイメージ含む）だけなのだ。「現在」「過去」「未来」の客観的時間概念をいくらいじくっても、時間の問題など解けはしないのだ。

繰り返すが、**永井氏の言われるような「*現実の動く現在*」というものなどない。変化した・動いたのは「経験」であり「時間」ではない**からだ。**同様に変化しないのも動かないのも「経験」であって「いま」ではない**のだ。

Ⅳ.「動かないものがあるから動くものが分かる」という誤謬

では、いったい経験の「変化」「動き」とはいったい何なのか、という疑問が生じるかもしれない。そのときによく見られる答えが、“*それを「変化」と呼べるためには、「変化」しないものがどうしても必要となる*”（森岡氏、137 ページ）というものである。

何かが流れているということが把握できるためには、 流れていないものがあることが必要だということである。両岸が止まっているからこそ、川の水が流れていることが分かるのである。ということは、時間が流れていることが分かるためには、時間の流れによって流されずに止まっているものが必要だということになる。（森岡氏、135 ページ）

・・・しかし、そもそもが「*無限に幅の広い川を考えて、その両岸が見えないという設定にすれば、今度は、川がほんとうに流れているのかどうか分からなくなる*」（森岡氏、135 ページ）のは本当であろうか？ そんなことなぜ決めつけることができるのか？ 広い海の波が動いているのは分からないのだろうか？

森岡氏は視覚的経験ばかり事例に挙げているが、音の変化や香りの変化、気持ち（情動的感覚）の変化などを考えてみれば「動かないものがあるから動くものが分かる」と

いう説明も説得力がなくなってしまうであろう。

> *まず何が問題なのかというと、時間にかかわる現象世界において変化のようなものが起きるのだが、それを「変化」と呼べるためには、「変化」しないものがどうしても必要となる。その「変化」しないものを「いま」として概念化し、「両岸」や「土俵」というふうに視覚化すると、それらが時間的変化を行なわない「実体」として機能し始めてしまい、「いま」は流れるけれどもとどまるという難問が生じることになる。それを解決するために、「変化」しないものを設定しないとすると、今度はすべてが時間の流れにおいて「変化」することになってしまい、そもそも何かが「変化」するということを把握できる不動の視点というものを維持できなくなってしまうのである。*（森岡氏、137 ページ）

・・・「変化」と呼べるためには「変化しないもの」がどうしても必要となる、「*不動の視点*」が必要であるという見解である。一見もっともなことのようにも思える。

しかしこのような考え方は、因果関係そのものをエポケーできていないことから生じるものである。具体的経験の事実（つまり現実性のレベル）から言えば、転倒している考え方なのだ。

どういうことなのかというと・・・「動いている」と感じているのは、ただ見えたものに対し「動いた」と思った、ただそれだけのことなのである。なぜ「動いたと思ったのか」その「理由」を問う、ということは事後的に経験と経験との関係を構築し「理由」として理解するというプロセスなのである。**現実性レベルの事実としては、ただあるものが見えて「動いた」と思った、ただそれだけ**なのだ。ふと「動いた」と思ったもののすぐ傍を見てみたら「動いていない」。そこに「違い」を見出したのである。では、そのすぐ傍にある「動いてない」ものがあるから「動いた」と思うことができたと言い切れるのだろうか？ 因果関係は常に可疑的である。そうかもしれないしそうでないかもしれない。

「静止しているものがある」から「動いている」と分かる、という見解は、こういった一連の経験を関係づけた上で事後的に導かれる経験則・因果推論にすぎないのだ。そして、それは**ただ「動いている」と「動いていない」との“関係”を示しているだけであって、「動いている」「動いていない」とは何か、という問題の答えに全くなっていない**のである。

では、**「動いている」とは何か？　「動いていない」とは何か？　「動いている」と「動いていない」との違いは何か？　・・・そんなこと、”論理”では説明できないのだ。**つまり、**実際に動いているものを見せて「これが動いているものだ」として具体的に示すしか方法がない**のである。流れているものを見せて「流れているものだ」と示すしかない。あるいは、笛でドの音の次にレの音を出して「音が変わった」と説明するしかないので

ある。

言葉と（言葉の意味としての）経験との繋がりは、究極的に論理で説明できない場所へ行き着く。青とは何か、と聞かれても、実際に青い色を指し示すしかない。あるいは自分で青い色を思い浮かべるしかない。青色を波長で説明できるかもしれない。しかしその分析には、実際に青色と人々が認める具体的事物があり、それを測定した上で波長との関係が見出せるのである。しかも波長とは何か、と聞かれればやはりそれも具体的な波形を描いたりして示すしかない。言葉の意味に対する説明を細分化・精密化したり厳密な定義を与えたりすることはできる。しかしそれらも究極的には論理で説明不可能な言葉と経験との繋がりへたどり着いてしまうのである。

しかし**論理で説明できないからといって、経験と言葉が繋がった事実、目の前のものを見て「リンゴだ」と思った事実は疑いようのない「現実性」を持つ**ものなのである。（そして、それが客観的に正しいというのは実在性のレベルの話である）

そもそも経験を論理で説明することが間違いなのだ。経験から論理が導かれるのであって、論理によって経験が説明されるのではない。

V.「自己出産モデル」の問題点および積極的意義

時間問題のアポリアを解く手がかりとして、森岡氏は「自己出産モデル」というものを提案されている。

> *私の提案する「自己出産モデル」とは、次のようなものである。まず「生きられている現象世界」がある。その「生きられている現象世界」は、その「生きられている現象世界」自身の全体を、みずから出産している。出産によって新たな「生きられている現象世界」の全体が産み落とされる。そして、この出産によって、新たな「生きられている現象世界」の全体を出産したところの古い「生きられている現象世界」は、その全体が新たな「生きられている現象世界」へと吸収される。「生きられている現象世界」においては、この「自己出産」というできごとしか起きていない。「自己出産」によって、古い世界の全体と新たな世界の全体が同一の内容になることはあり得ない。なぜなら、「出産」とは古いものから新たなものが出てくることを言うからである。*（森岡氏、137 ページ）

・・・この「自己出産モデル」は、実質的に、経験が現われたり、消え去ったり、新たな経験が現われ入れ替わったりという、要するに「変化」というものを、物語風に脚色して説明しているだけであって、実質的には「変化している」ということ以上のものを

何ら説明していない。そして「*吸収され*」ているのかどうかは想像的イメージ以上のものにはならない。具体的事実として観察できないものだからである。

さらに言えば「現象世界」というものも仮想概念でしかない（だからこそ「モデル」なのだろうが）。“*「生きられている現象世界」はその全体が流れ、動くのであり、変化せずにとどまる実体はない*”（森岡氏、138 ページ）というふうに、なぜ「全体」として一括して生まれたり消えたりしなければならないのだろうか？

さきほどの事例をもう一度振り返ってみよう。白い壁をじーっと見ているとき、具体的経験として現れているのはただ見えている（現れている）もの、それだけである。そして「白い壁だ」という言葉を思い浮かべたり、その白い壁に関する何らかのイメージが浮かんできたり、その連想したイメージに伴いある情動的感覚が生じたり、そういった新たな経験が浮かんでくることもある。そのとき、見えているものが消えているとは限らない。見えているものを「白い壁」と呼んだとしても、その見えているものが消えるわけではない。カレーを見て「おいしそう」と思ったり味を思い浮かべたりしたとしても、目の前のカレーが見えなくなるわけではない。

このように、**経験そのものは「*その全体が流れ、動くのであり、変化せずにとどまる実体はない*」わけではない。経験それぞれが生まれたり消え去ったりもするし、変化せずにとどまることもある**のだ。

つまり、この「自己出産モデル」はあくまで「モデル」、検証不能な想像的仮説以上のものにはならないのである。

また、前章で既に説明したが「動かないものがあるから動くものが分かる」という見解は「現実性」レベルにおいては誤謬であって、**「*不動の視点*」やら“*「生きられている現象世界」全体としての自己同一性*”**（森岡氏、138 ページ）**というのは「変化」「動き」を認めた事実がまずあったうえで、事後的に因果的把握されたり想定されたりするものなのである。**

> *では、それはいったい何に対して流れ、動き、 変化するのか。その答えが、もうひとつの側面であるところの、「自己出産」における「生きられている現象世界」の「自己同一性」である。全体が全体を出産するという自己同一性を不動の参照項とすることによって、すべては流れ、 動き、変化すると言うことができるのである。そして、この自己同一性こそが、 時間の流れに逆らって止まり続ける「いま」の本体だったのである。*（森岡氏、138～139 ページ）

・・・つまり「*生きられている現象世界*」という仮想概念を「いま」としてしまっている、ということなのである。

一方で、「自己出産モデル」には、永井氏にはなかった新しい視点、一歩進んだ面も見られることは見逃せない。

「自己出産」の働きこそが、時間の流れを作り出しているものである（森岡氏、138 ページ）

・・・つまり、**自己出産（実質的には変化と言ってもよかろう）が時間の流れを作り出している、という視点がここに現れている**のである。**永井氏が”*「現実の端的な現在」と「現実の動く現在」*”**（森岡氏、139 ページ）**というように「現在」を「現実性」として捉えてしまっている**、私が指摘する**「今・現在を経験している」「今・現在が動く」という誤謬に陥っているのに対し、この文章のみを見れば、森岡氏は「現在」が「動く」という“思いこみ”から離れることが出来ている**のである。その点において、森岡氏は永井氏よりも一歩先に進めているのだと言える。

そして、その「自己出産」（「変化」）とは、やはり「現実性」なのである。森岡氏は、

「現実性」のほうには「動き」が内在していない（森岡氏、140 ページ）

・・・と説明されているが、そうではない。一方、

現在が動くということを、「現実性」を巻き込んで説明する必要はないと私は考える。（森岡氏、139 ページ）

・・・という指摘は（文面的には）正しいのである。なぜなら「*現在が動く*」というのは「実在性」レベルにおける認識だからである。これから見るに、森岡氏は「現在が動く」認識から自覚的に抜け出せていないのかもしれない。“*「生きられている現象世界」の「自己同一性」*”が”*時間の流れに逆らって止まり続ける「いま」の本体*“（森岡氏、139 ページ）という見解も同様である。「いま」は「*流れに逆らって止まり続ける*」のではない。経験していることを「いま」と呼んでいるだけなのである。

私たちは、経験を「過去・現在（という瞬間）・未来」「常に流れる時間」というフォーマット・枠組みに振り分けて理解している。これは事実である。しかし、この枠組みがしばしば実際の経験と齟齬を来してしまうことも事実なのである。

実際の経験は、単に、見えているもの・聞こえているもの・感じているもの、言葉や浮かんできたイメージといったもの、変化したりしなかったりしている。常に流れてはいないし、瞬間でもない（瞬間かどうか判断しようがない）。それ故に、問い方を誤ることでパラドクスを引き起こしてしまうこともありうるのだ。